日経産業新聞
NIKKEI BUSINESS DAILY
2010年(平成22年)
10月19日
火曜日
■日本経済新聞電子版 http://www.nikkei.com/ ■日経産業新聞online http://www.nikkei.com/tech/ssbiz/ ■購読のお申し込み 0120-21-4946 http://www.nikkei4946.com
土曜・日曜・祝日休刊

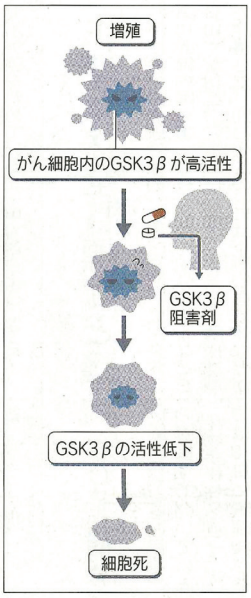
難治がん治療薬開発へ

3年内に承認申請 脳腫瘍にも有効

金沢大

【金沢】金沢大学は治療が難しいとされる悪性脳腫瘍（しゅよう）や、すい臓がんに有効な治療薬の開発に着手した。精神疾患などに使う4種類の薬剤が、がんの進行を抑える性質に着目。これらを使い新薬を作る。胃や大腸、肝臓がんにも効くとみており、将来はがんの共通治療薬を狙う。大手製薬会社と組み、早ければ2～3年内に国への承認申請を目指す。

例えば、脳腫瘍の一種である悪性神経膠腫（こうしゅう）は頭骨内にできる腫瘍の16%を占め、発症後の平均生存期間は約1年とされる。すい臓がんは年間2万3000人が亡くなっており、治療開始から5年後の生存率は7%を下回る。いずれも正常組織への転移が早いうえ、既存の抗がん剤や放射線治療が効きにくい難治性といわれる。



金沢大の源利成教授と浜田潤一郎教授を中心とする研究グループは「グリコーゲン合成酵素キナーゼ（GSK）3β」という体内酵素が、がんの進行にかかわっている点に注目。同酵素の働きを妨げることで、がん細胞の増殖を抑え死滅させる治療法にめどを付けた。

GSK3βの活動を抑える薬剤としてリチウム製剤やシメチジンなど、うつ病や胃かいようの治療に使われている4種類の薬剤を転用。従来の抗がん剤と組み合わせ経口投与したところ、一定の効果を確認した。通常の治療後に再発した神経膠腫の患者を対象にした臨床試験では、生存期間が平均に比べ最大で50週延びた。すい臓がんも研究グループに参加している金沢医科大学で臨床試験を実施する見通しだ。

今後は4種の薬剤を開発した製薬会社などと連携し、他の薬剤との組み合わせも研究。科学技術振興機構の助成金なども活用し、がん治療に特化した新薬を開発する。